

月瀨紀行

乾坤全

~ 5  
5872



二品大勲位尾親王殿下御題字

月瀬紀行

平安

木識庵聽秋著

49-2711

5872

版權  
所有

馬



分類  
番  
號  
315  
236(1)

子

以  
正  
元  
年  
九  
月  
十  
八  
日

二  
品  
大  
勳  
位  
亮  
親  
王  
丸

山の頂、谷を登るを  
と理深、那身笑つて  
證梅おまじし月の瀬の  
梅尔志入字駒佐也

月瀬紀行序

余嘗遊大垣訪小原鍊心於其無  
何者莊時方梅花盛開即設筵花  
下而飲座間有一年少行酒者即席  
賦詩數章奇警驚人鍊心曰是吾  
家千里駒也向其名曰聽秋後不相  
見十餘年鍊心下世聽秋為俳諧人  
一日來謁曰吾性多病遂廢學業

但放脚於山水託興於風月聊以娛  
生有近著月瀨紀行乞子為序披  
而閱之其辭之芳如梅花思之清  
如雪月而篇章曲折之妙使人神  
遊乎梅七國萬玉堆中余拍案  
嘆曰有是哉奇警如是何復論  
詩之俳諧哉但憾不重起鍊心相  
共舉巨杯劇賞之也

明治二十年十一月如意山人谷  
鐵臣撰并書于乾坤清氣樓  
之南窓下

不遠菴園之程の多しし初月之激  
乃如悦し觀枝北學の功の以て予し  
又おろして其心と思ひしもの

暮川心梅の夢の杖の何と

曉花園集和

月瀨紀行序

不識菴主聽秋君者美濃大垣人也明治三年余在家  
郷其居相近時到其邸共讀史書課餘偶得見君之詩  
稿其一絶句云男兒立志何畏死五大洲中有墓田此  
足以觀君之素志矣君嘗修英學于大學南校蚤欲遊  
海外其期在近偶罹肺疾不果其行遂不復事學業爾  
後移居西京友山水娛凡月好俳諧業已為宗匠云余  
也予君分手之後移住南越尋奔走東西二京之間九

年遊英國留學七年餘十七年歸留東京今年遊印度  
又那歸住西京始聞君在此地其居亦不甚遠然未及  
相會君已介小川果齋君索余序其月瀨紀行篇章之  
妙已詳于如意山人之序余復何言抑令伯鐵心小原  
大夫生平能与人交蕞洲毛苴二詩僧居常以詩酒相  
交者也十數年間三人皆去世矣果齋君者蕞洲師之  
第二子而余即毛苴之第三子也共離家鄉在西京復  
結文字之交可不謂風流因緣乎哉乃不辭而書

明治二十年十一月三十日

碩果生南條文雄



月瀬紀行軌の巻

平安 又識庵聽秋 著

和州の音聲界を親よ非よんハ秋生あんと梅花を説へきと

山陽篇の芳味の一皮吟眸に觸るより月の涙に遊さんとを

此思ふハ年よ切あはるも花初に始る事ありと云く幾

年の星霜を過せしう今年信樂の門生等相圖梅黄分社

を被置せんとさる頃幸と社を密あしむハなりぬ芳甚蕉翁

う芳野の折の折や軌伸喜任同行二人と笠よ樂堂せ

らせしうを思へハ人の生似る猿よけうせと余志梅堂の

裏よ天地我廬同行芳系とわん一筆を明治丁亥三月二十

五日旭日三竿萬壽小路の存庵をぬるとき

るすくすくをふりてれと梅の香 聽秋

乾之巻

金子師云傲也爾清  
曹集明治之文運意  
匠大

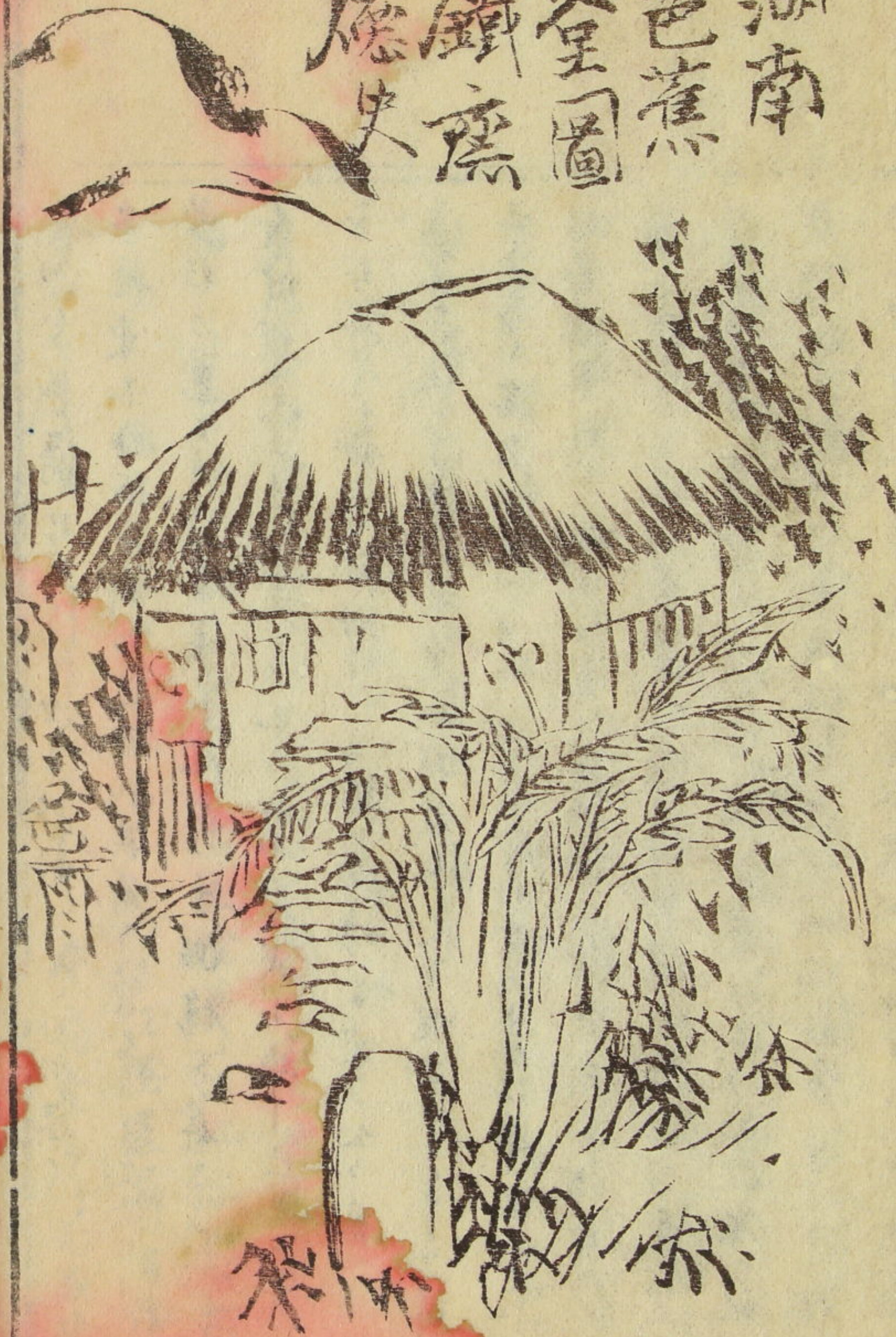
小川平清云可詩  
小東海心先生天師  
薄唇面句為島立使  
大眼望其風水

關道軒云乾坤無任  
天地我廬一湖可  
爾兼翁再生

又云開卷第一先得  
地勢句想見芳唇  
貴安翁主人早四



湖南  
芭蕉  
畫圖  
鐵齋  
隱史



あり情むよありあり今井道平より自柱に向のねも  
数百年の星霜を經り此より共一途の煙をいなりぬと  
尾主作若老の若語を写或ハ無と或ハ歎を吐漢教  
刺し及ひま

真あつらんきくや初しくせ 胎秋

あむ 楳よきまの義 出 名若

楳のほさきりし出の言を立す 梅年

瀬田橋上より車を輕め紫式部より源氏の巻を綴り石山  
名目おし宴出し琵琶湖に字をを見り遠近の青嶺を  
影を湖水に影倒し鮮明あり楳の蓮東波り西より  
比し西湖の影されしは風志ハ天下無比と思ひ  
向を福せり

湖の心 是よりいふをよめあり

旅亭新居より此の社員山智を撰へ給交くれ共観計を  
吸し杯をけけ晝飯を多し祖菊の夜を忘せしむり  
きまをぬかす乗し勢田を解し大戸川の遠より影を  
玉轉るる尺の端給りや夜を此より書き楳の深し  
くやを停めをを歌をわら忍病室のふらを隠敬し細  
雨降其れは若く本屋に晴るを待つ春の世にわら春を  
蔽ふ大まよおせしや例ありしはわらと我の心よりいへ  
るは結せし力をも只一句をわらしけし解し書しはま  
ある如甲 落のうら 松あつら

其より不動院より其の岩を打の漢水に下り白く清を  
その竹林に遠近より石徑迂曲余の折をいへる慈景人抱

佛云遠懐之情溢于  
外  
遊云一句中寫無盡  
意

明云春色湖山水  
停秋  
春云雨寺宿母解料  
西有想見若兄操筆  
待意之狀  
人云蒼嶺中豈居  
春皇封者哉今得  
此名向應拜賜之  
厚也  
遊云得地一句水  
之榮有餘何音春  
天光著秋

乾  
之  
卷



松  
年

草  
之  
卷

不  
動  
坂





三三三三三

三三三三三

三三三三三

三三三三三

三三三三三

連り、形影の飛ぶ、くま、蘇波の起り、と、煩、あり、若、大友の王、  
り、去、の、軍、を、防、ぎ、終、り、一、段、あり、と、里、人、の、清、く、を、多、く、  
を、退、懐、く、無、情、止、と、  
袖、一、ふ、り、お、の、手、じ、ま、さ、り、

西、の、山、より、多、く、西、村、を、過、き、水、川、の、磯、より、多、く、金、鳥、の、南、天、  
よ、り、東、風、梅、雪、を、た、ら、れ、黄、粉、を、ま、を、吐、き、梅、香、を、動、し、  
竹、葉、の、音、も、見、ぬ、月、の、影、を、乗、せ、り、喧、れ、中、に、何、山、の、  
連、り、

黄、を、く、す、り、あ、り、と、あ、り、あ、り、あ、り、あ、り、あ、り、  
梅、又、あ、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、  
あ、り、あ、り、あ、り、あ、り、あ、り、あ、り、あ、り、あ、り、

と、連、り、明、日、は、あ、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、  
松、系、の、知、色、ふ、る、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、

三三三三三

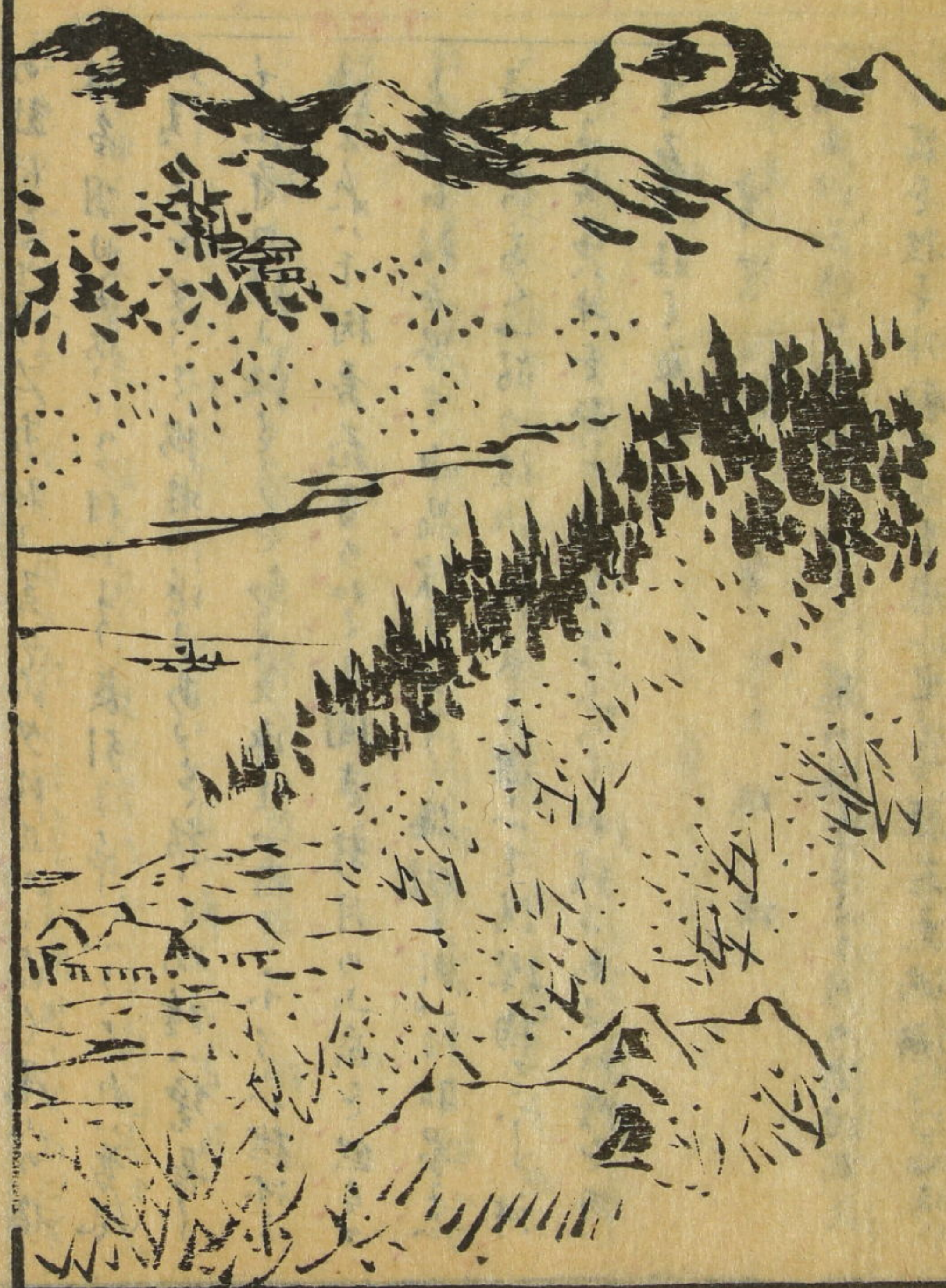
三三三三三

の、数、村、を、過、り、石、打、村、より、多、く、あ、り、あ、り、あ、り、あ、り、あ、り、  
林、を、明、日、は、あ、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、  
ハ、清、く、を、送、り、り、梅、村、の、近、は、あ、り、を、防、り、晚、鐘、の、響、長、り、  
と、山、寺、の、流、は、流、を、を、知、り、黄、粉、一、月、子、不、り、小、梅、林、の、  
連、り、れ、八、千、樹、葉、花、雪、の、わ、く、小、園、き、新、月、の、上、岳、を、照、り、  
と、終、り、銀、在、界、中、水、晶、溪、と、云、り、梅、樹、の、外、一、も、野、界、よ、り、  
り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、  
由、り、告、多、六、半、を、懸、り、耳、を、流、し、り、和、語、子、知、さ、り、終、り、  
り、る、を、流、し、り、

音、響、り、物、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、  
梅、村、

流、り、流、り、梅、を、送、り、り、嵩、の、流、を、り、り、月、の、流、り、梅、久、  
り、流、を、流、り、庵、厨、の、近、を、流、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、

月一空望



乾之卷

久保田米徳元生

畫

月







梅武子身三 小憩を梅樹の屋

後撰 梅香三 浮沈を三 應芳の梅

を失ふ三 思ふれ三 梅武子身三 小憩を梅樹の屋  
後撰 梅香三 浮沈を三 應芳の梅  
枝は秀吟粗句の別あり結むる色紙短冊の書りよる  
七夕の唄の如く詩家ハ秘多くハ通るへくは教人の歌多くハ  
去る聲くも俳士ハ句多くハ動へくも云ぬ三 梅香  
積都三 行人ハ逼れ余を連日の梅香ハ破下吟情の  
起らさすハ河の事ハ形ハ嘆す 梅の花ハ蒼北翁ハ遺情  
を手帳の紙を裂き木筆ヲ筆ハ河ハ梅樹ハ錫ハぬは村ハ  
三学院ハ峰ハ梵刹あり若山陽翁ハ水ハ梅を留めらる  
要ハ今尚存せり云々 晚鐘ハ梅香ハ情込むあは  
ん 梅ハ尾山を辞を石打より車を翻り 夜ハ今友志  
ハ帰り君白老ハ同宿也

共ハ魚ハ形ハ梅ハの相流り 白

梅ハ白 梅ハ白 梅ハ白

梅武子身三 小憩を梅樹の屋  
後撰 梅香三 浮沈を三 應芳の梅  
枝は秀吟粗句の別あり結むる色紙短冊の書りよる  
七夕の唄の如く詩家ハ秘多くハ通るへくは教人の歌多くハ  
去る聲くも俳士ハ句多くハ動へくも云ぬ三 梅香  
積都三 行人ハ逼れ余を連日の梅香ハ破下吟情の  
起らさすハ河の事ハ形ハ嘆す 梅の花ハ蒼北翁ハ遺情  
を手帳の紙を裂き木筆ヲ筆ハ河ハ梅樹ハ錫ハぬは村ハ  
三学院ハ峰ハ梵刹あり若山陽翁ハ水ハ梅を留めらる  
要ハ今尚存せり云々 晚鐘ハ梅香ハ情込むあは  
ん 梅ハ尾山を辞を石打より車を翻り 夜ハ今友志  
ハ帰り君白老ハ同宿也

乾

十一



蒼石遺跡  
 蒼虫居之園為  
 秋先森 耕居白山居士癸卯





徳云有惟通言無世  
大比篇下可下統

果云余下所研句  
法界論教曾有詳釋  
詳細之類則詩併  
其按可也

徳云懐冷

の祖云を控せしハ最めくくきくありき後攻郷派を吊ハ  
んと愛深町の愛深院よむ竹林の片隅に古き苔む  
くく研あり君を拝して視せむ花意庭探香法成と  
大空に刻し生れは是正しく祖翁の塚ありと香花を多向  
敬拜時をうつしつたりぬ

やーおれおれいふふーいふのう

上野公園にあり公園を藤堂家の意城郭より昔菊村  
順芝々築くまきく庄宏の石置ハ千何の岩壁のゆく外濠  
名中下よ流し流るるくく深き百尺是を望め我々競  
くくく肌膚よ粟粉を望き東北ハ樹木森々くく天に  
泰一天主臺ハ巍々くくく雲よ入る鳥りく見せハ村境岐  
坂の松木依のぬく青く北川の流ハ岸のぬく白く是れ村

徳云有惟通言無世

はハ膝下よおき防楽屈竟りく千軍を過り万馬をこ  
りくくくやまきく後へくはおもくききく隊射ハ今も  
をく委ね公園くあり遊楽の徳さくくく彼の謙然也  
むくく新おくくくく此泰平も明治の今日服考ハ過  
りぬ又あり此年のさく位もくく一層省ハ今も田畑く  
く袖裾のねんねくく侍もありき世の愛深ハ二十年の  
霜よ生けあり異域ありく

泰平よあきく味やふきくくく  
那奴

二十九日晴小田村より陽着森元章氏に招き備付去塵  
呼ぶ別亭あり窓を屏き見せられ先主泰平と相対て  
既後あり先橋州の酒樽海の魚を以て饗する一杯ハ人海を  
秀と二杯ハ海海を春の期よむり深意よ有く思くれ



梅舟の法務を記き多う、を成し祖翁古蹟の考選を  
話して、夜の更にもあつたりき

三十一日雨は日病床よりありあつたり耳目は弱く書を借  
記さんと書を取らうともあつたり道の死つふり此に紀氏長  
烟而佛尼の文を記し情を考つたり其時其贈物を取  
る能くし書卷も云せたり此に月俵より抄書あり  
満腹文書の力を以て振つたり此に月俵より抄書あり  
冬編の文章より顯其翁の文章ハ月俵に記書を以て考つ  
余のゆく浅草種才の末を考つたり非つたり此に文章を  
借らう言語を振つたり此に月俵より抄書あり此に文章を  
川と只前目の編つたり此に月俵より抄書あり此に文章を  
病苦を記つたり此に月俵より抄書あり此に文章を

累三猶詩以味極化  
有無不歩林高樓  
也欽

又三思之謂此紀行  
又云老兄亦曾此周

ハ燈とありと魚裁の意、就我或ハ此、業、  
女界と此に因作の及ぶ、快楽を多せり千秋屋、  
病体の法然を記す

只てくも此山里をくく、  
弟も、黄、夢、  
胎、  
胎、

四月一日雨病の快く、  
着漢を得て病を養ふ胎虫京都より雨を冠、  
外社漢書の準備を誤つて夜に入り深き、  
眠り



題云此中寓諷刺意  
存之亦可今附抹  
何也

果云此夢是何夢也  
蝶戲花那將參鵬海  
月宮耶惜墨塗林秋  
本龍身之也

梅一枝の清香も暑くありて  
袖より肝心の暑くもを知らず  
二日雨早天社負ハ杉月古の野  
舟の清香も此は長き草石  
を換ふまのいれを服を半  
後長雨の晴まのせ病も  
此は愈の思ふまゝの属も  
その意の池を揮舞まの  
水もより知るか  
癡

孤燈明滅枕頭も酒残り乾

此葉も情のそはれも  
初中の袖も長きを防くのも  
或ハ詩歌を  
乞ふ出あつても  
さうして通はれ  
るを心固く  
解るる  
彼地も  
つゝも  
つゝも  
つゝも  
つゝも

宿望十年遊月漸尋春  
旬日院吟獨倚小松樹  
白於雪

銀玉界中人  
散香

月影漸沈  
名をなく  
つゝも  
つゝも  
つゝも  
つゝも  
つゝも  
つゝも

吹直る水の  
あつても  
ぬるる水

今夜佐木の  
仙人松下  
孫松枝社負と  
ある女  
病公  
松の  
空  
吹ま  
つゝも  
つゝも  
つゝも  
つゝも  
つゝも  
つゝも

三日晴裡  
前首  
條を  
床に  
垂り  
海山の  
珠味を  
供し  
社負  
喜

果云三四句  
意不明  
原翁は  
南無  
自西行  
集詩集  
之  
亦知非  
漫然作  
詩  
周禮之  
源也  
以見也

會分社設墨武を行ひたる假託よりりぬ

是のくの骨新尼をよ奉招分

於秋

ゆゑに深しと云ふ事

そを

飛ふ乙ちとちまふの振うも

水石

まのうふ若り旅の長引

よま

名月ち更と芽とのふくつあり

水梅

生壁ありの橋の秋

杉月

まき一秋よりむ録ま直の防竹

苔子

あふりて飲と酒のほらり

ね旭

まのよりの燈を伴し百もそり

古月

春理ふ秋ハ神も枝む

ね林

竹指り若ハ木の葉のあをり

少醒

雪うやあしん月一處ふ雪

酔ね

社橋真をあらりて目ハ玉清

雪院

軍さゆりてを新ちりて

新子

若者よ大壺杯をとりたせ

八重町

梁よいさみの為純

楓枝

圓きる若の事ふりて

鶏生

吾ちとあふりて

船虫

假似終り時疾く借をゆり

五石

四日新時船出早し

起き

降降りいさふ若き住業あり

報る

め臥依のうちより茶を回し

舞

四代友多羅尾氏より招き

更

面う怒をいさふ

逆

周家の支香より法候より

恥

乞之卷

乞之卷

大開の多羅尾氏の祖先へおくる書一紙の程舟あられのたゞを

ありめやうよきよあらうの吹しきや

たうあう書きを言とるしん ありき

傍に半弓あり後川家康公大坂陣に携せりし後

多羅尾氏の祖先に送りし書にありしとてかゝる書は解有る

る品を視を得る幸福と云へ

梅うぐいすを言とるしん ありき

香爐峰の麓に此を置き家を開く才女あり玉樹八祥を

呈し任ふる瑞を欺し仙家味なるをうぐいす凡常を候し

基氏も鷹丁を抛り金をとるしん梅を把る風光を賞し

解し書しし書を味く梅の乱れんとし梅七紐を解しし

遂に是跡一奇觀其  
得意可知

果云天皇奇景似助  
若餘與并

又云用此書  
記は神書なり

ふと和駱蕩の昨日は愛り大雪敷をより深き八余り月瀬林

懐に沈瀟しるを膝六張二つ時ふしきう天降し月の影

梅溪の銀雪界と喜途の光景を幸しし是を見たりありし

あつらハ雪と結ふ交点す社島の遺跡より得し結

樹も有る一ふまふも知れぬありし是ハ十文字と結し結

ありぬのちをよき生れ雪りうへ

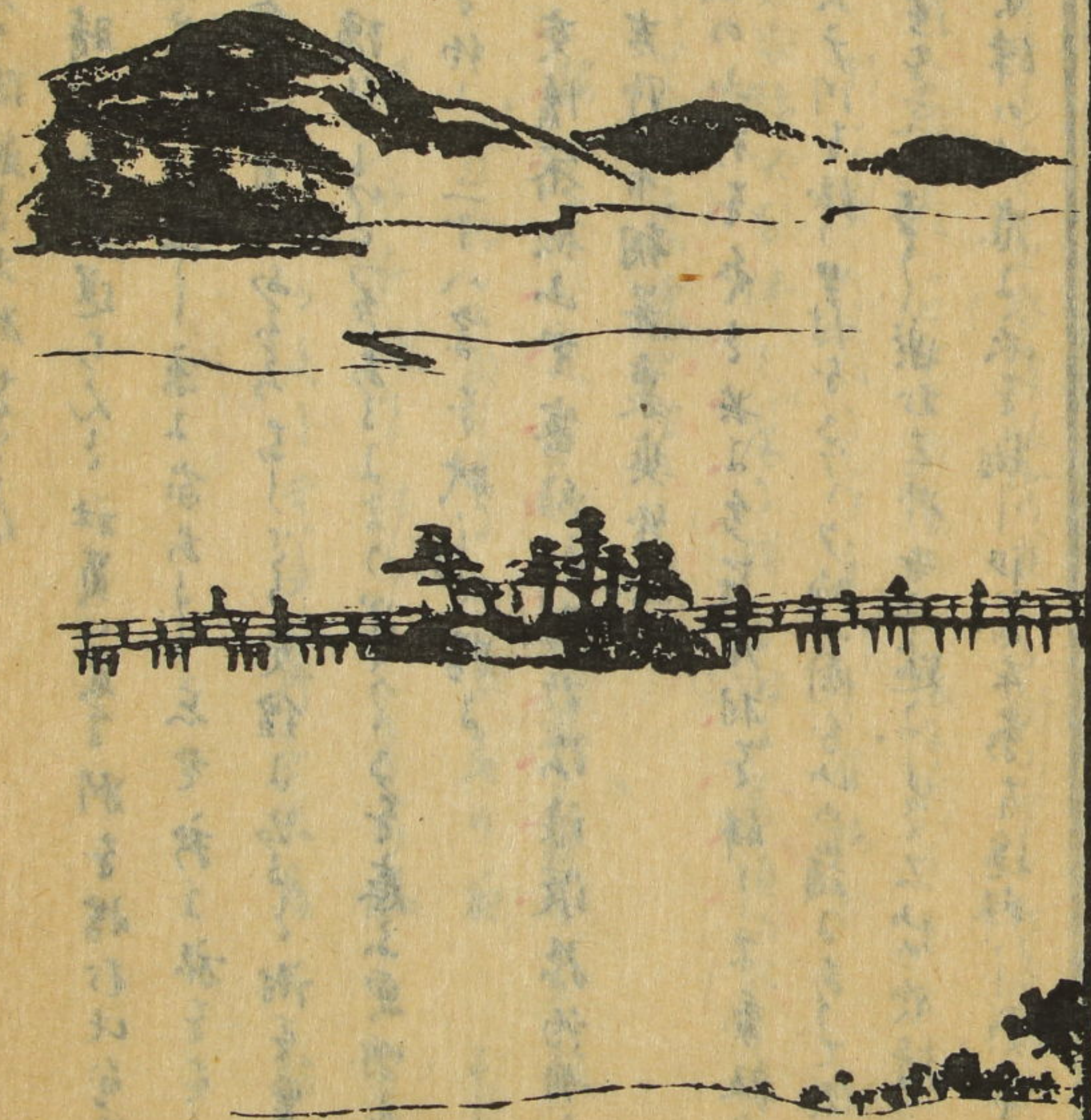
五日す候し秋虎に於て送別の宴を開き社負東會し且配

且漢を伍林の秋候ハ甲越の兵を遣ふし夜く金の前と東

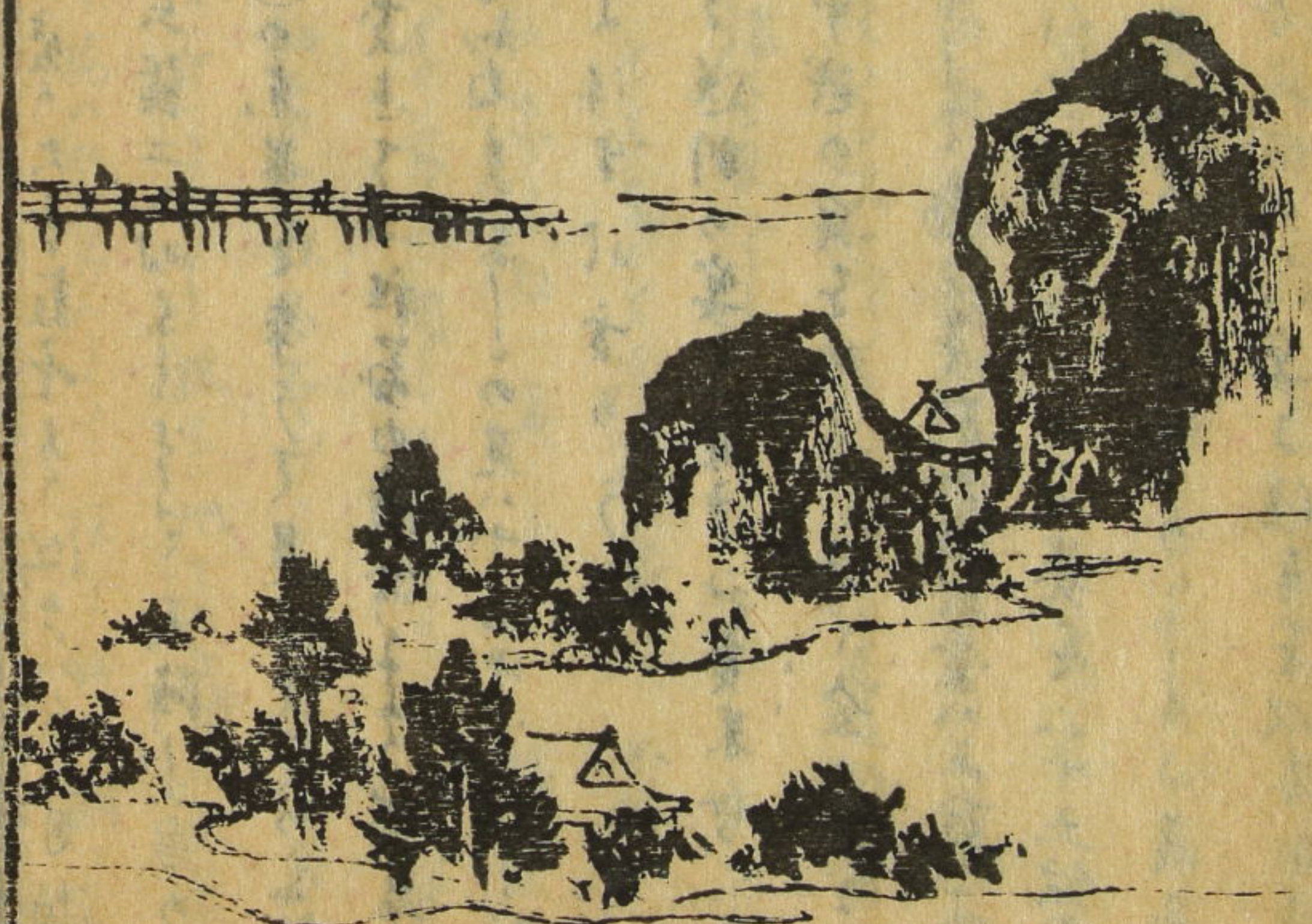
其の連塵の面壁の胸くしき動のを聴松の北堂ハ三弦と世に

至妻女の籠琴よ結し六段とふ一曲を奏す二十五弦の夜

月ふしぬのは如技法を習ふ今也伸らんしき書層も



石月



何人々陶然と大醉せん

六日晴余を見送らんと社員ハ其を惜むは旬日の法  
二倍蓋を洗除一末の家ありも忘れ新の旅を去るの思  
るハ余々社員のあふあふする交遊ハ出ると謝を豊后ハ月  
の瀬随りもつきあるよよう果さくを慮ふ更明真ハ芳  
初を約一二十八字を賦一贈る

交情密似山雲密離恨深松海浪深孫約明年遊

吉野本朝花裏爽吟心

朝暉の山岩を冬と共ハ多羅尾村を辞一不動坂の峻を  
越ハ大戸川を渡り里村を去り夕陽ハ國台山の嶺ありて依田松野  
を望むを記して喜しく樂む三井寺ハ遠く石山の歌聲を送ら  
せ粟津の晴嵐ハ衣を翻一社翁本朝を遙拜一秋の虫をば

秋云真率有

秋云真率有

秋云真率有

あまももくは秋雲遠坂山の真珠山斜の里とありてき日  
の思を月  
小雛ハ家お庭も少く、秋後の梅葉も此つき  
おのうきく月も子を引くお梅か

高歩船史を伴う屋下情を對し兼頂山致りの左風  
あふれてあまの更を船一也

梅の葉ハ原ありて追ハ旅ありて  
春ぬきく  
葉の戸を明け移りて去るの風  
只梅の葉と母より耳を土産  
船史  
兼良女  
芽粟  
船史

丁亥十月如意山人安此

此一篇所主乃在觀海故中間極力寫其平神寓其風采  
其韻致隨其進趨竹梅花真體自在翻其始無餘蕩一  
費之下覺字々皆當時一火之冬十二月於皆夢樓上  
海微笑之處遂軒散史亦批多作

聽秋老兄與余先人大夢自唐一日余隨谷如意翁過其  
東山下識春圃有目瀨紀行一梓之舉心大贈之翌若兄  
袖此卷來過余廬使余強評之父執之請不得辭乃付一  
二評語於欄外選之余作排向固為門外漢請裁取焉若  
夫老兄之才之興技則如意翁序又已悉之矣  
明治丁亥冬月  
附知果齋小川泰拜識

月記分評 韓六卷

いづつか心を海の  
なまめ

照る月を二つよ

梅と柳の年  
龍

梅は雪とちちと句つる香らん架も松も芳

客主満系う事四月と楳 雀彦

照る月のおよぬあし梅の系 水琴 晴嵐

松の枝は雪をとりぬれぬ楳

梅の月夜に  
あはれ  
のさそを  
耕雨

志しあの白く  
うつくしく  
梅白し月を  
夜よて  
月主

舟し行  
月よ  
白く  
月と梅  
淇園

梅の花  
草花  
和歌  
手ま  
梅  
静快

函館 越前 能登 西京 函館 周防

四  
斗  
吉  
江  
河

と利くも邪しな枝をし梅の花 可然

梅の香しき一し月と香しき一し也

梅の香しき一し月と香しき一し也

梅の香しき一し月と香しき一し也

梅の香しき一し月と香しき一し也

雲世園色  
の瀬唐宗匠一乃御行

梅





あしき折る枝さるる地も  
梅の白借るも 董水 長流  
梅の白借るも 董水 長流  
梅の白借るも 董水 長流  
梅の白借るも 董水 長流  
梅の白借るも 董水 長流  
梅の白借るも 董水 長流  
梅の白借るも 董水 長流  
梅の白借るも 董水 長流  
梅の白借るも 董水 長流

里振りの宿をさるる梅柳  
梅の白借るも 董水 長流  
梅の白借るも 董水 長流  
梅の白借るも 董水 長流  
梅の白借るも 董水 長流  
梅の白借るも 董水 長流  
梅の白借るも 董水 長流  
梅の白借るも 董水 長流  
梅の白借るも 董水 長流  
梅の白借るも 董水 長流

ふくろもも 埋之 ぬぬ ぬぬ  
梅の 徳

梅の 梅を 梅の 梅の 梅の 梅の  
梅の 梅の 梅の 梅の 梅の 梅の

梅の 梅の 梅の 梅の 梅の 梅の  
梅の 梅の 梅の 梅の 梅の 梅の

梅の 梅の 梅の 梅の 梅の 梅の  
梅の 梅の 梅の 梅の 梅の 梅の

梅の 梅の 梅の 梅の 梅の 梅の  
梅の 梅の 梅の 梅の 梅の 梅の

梅の 梅の 梅の 梅の 梅の 梅の  
梅の 梅の 梅の 梅の 梅の 梅の

此蕉翁真跡下識庵紙幅馬

酒以夢  
河月窟

大僧正松平實因師

月  
梅  
山

心 戊子一月為  
不復莽莽也  
東寺長者室因

法月法堂梅一  
香風若有曉  
身如泥得中  
別號所免矣  
擇至新編





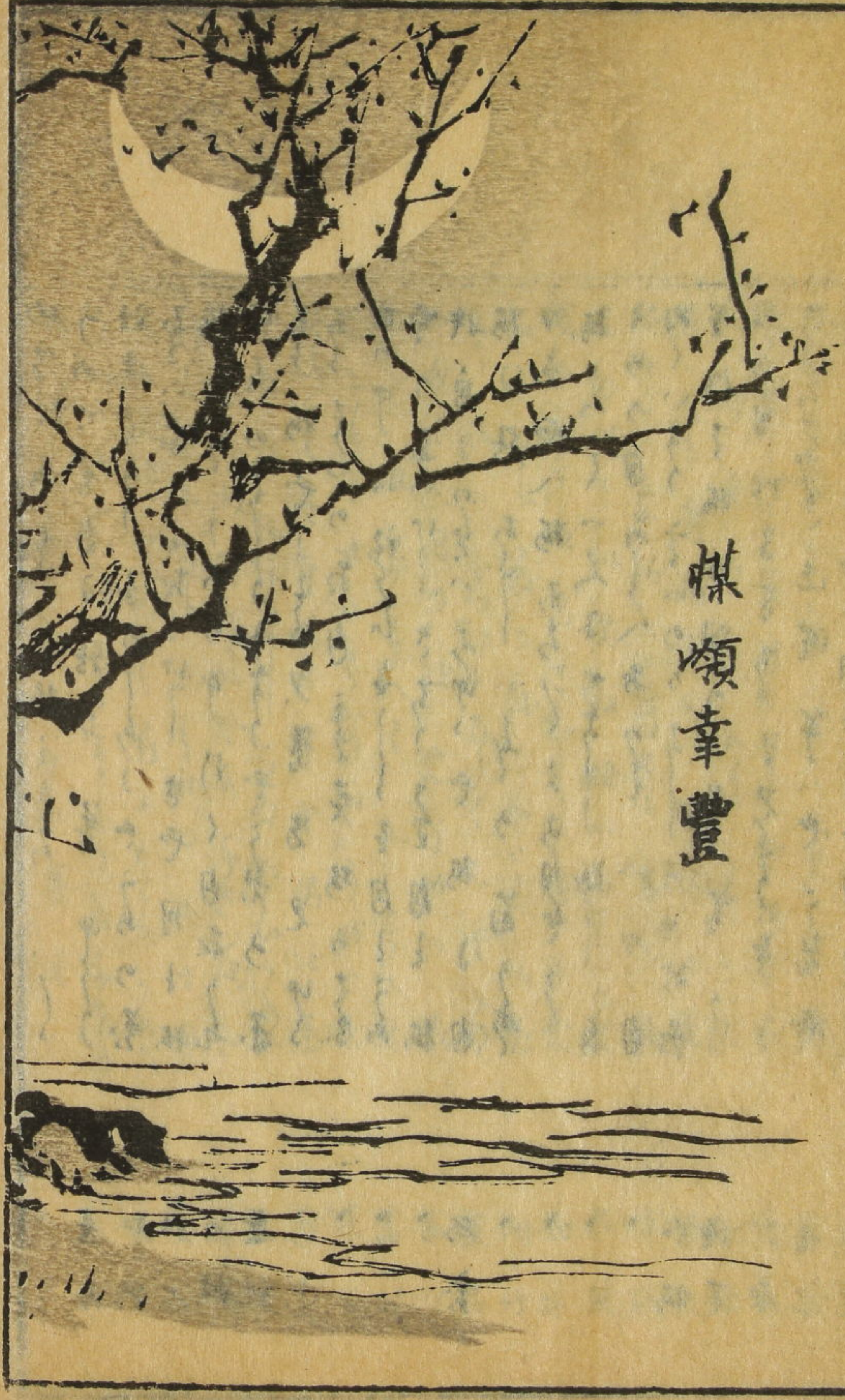
神之卷

辛野梅嶺先生



神之卷

梅嶺幸豊



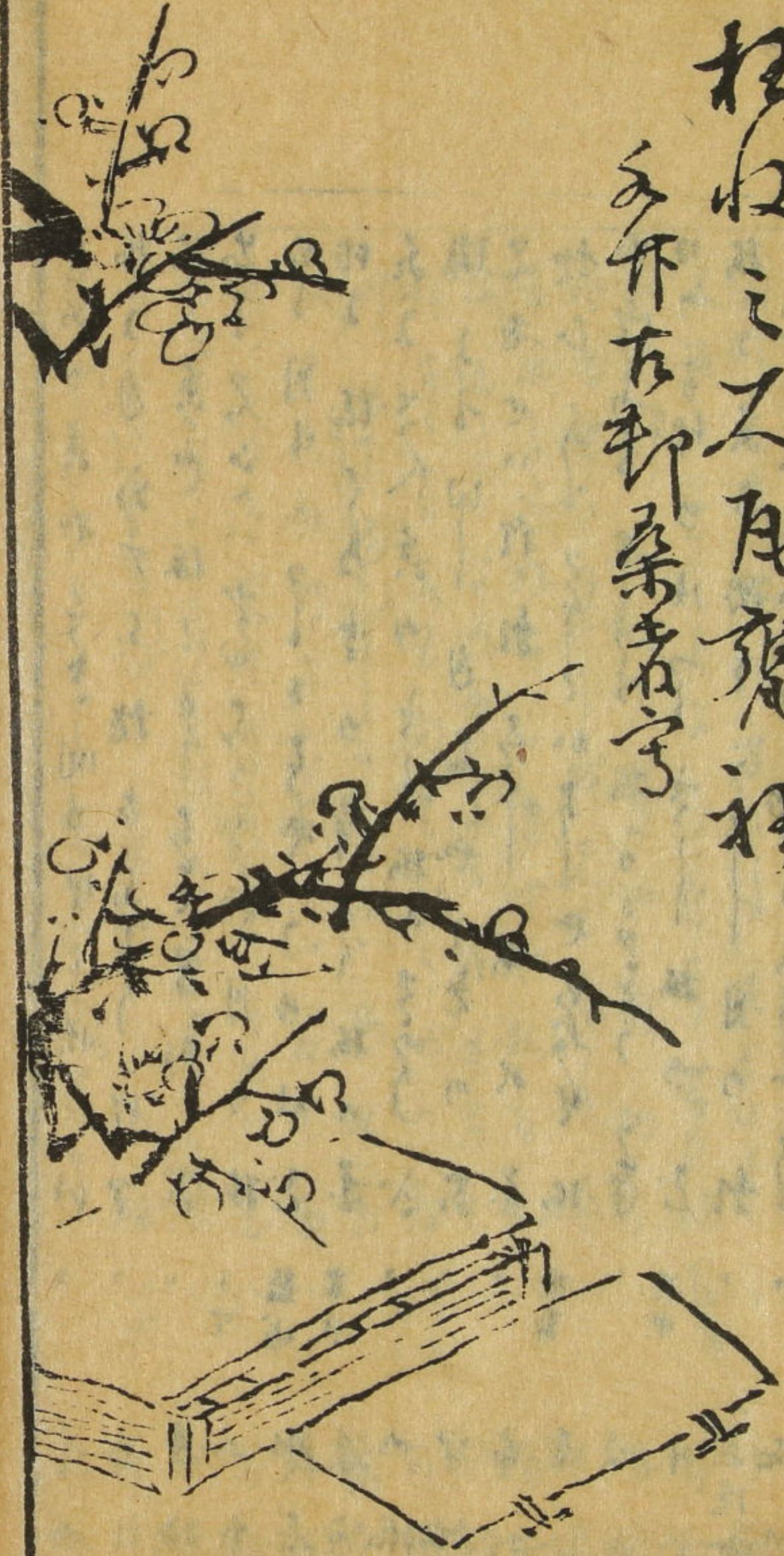








誰復江南十里香  
 相收之入瓦甕裡  
 多开右却桑者字



今枝のありも風の情やうめめむ  
峰のゆめもいよこふう色のそふ  
雪の梅のすくさくさう山此月  
人昔ハ委めも伊の梅のうむ  
手おんとそぎハ枝あしうめむ  
若うみやうもも腰けり梅のそむ  
名坏ハ田舎よ多しうめむ  
障子よと鳴りあゆふよ梅のうむ  
又初手の雪ハあゆり梅のうむ  
月の清水梅地流ハ雪のうむ  
月よると留らるるうめむ  
うらうらとそぎをそぎハ梅のうむ  
雪いとそぎをそぎハ梅のうむ  
梅中ハ自又ふきおるうむ  
うを嘆き梅の雪をそぎハ梅のうむ  
彩風の雪の葉あゆりうめむ  
朝夕の雪さハ雪ハ梅のうむ  
雪敷ハ雪ハ梅のうむ

庭　木　下　水　景　水　風　花　山　中　不　中　不　中　不　中　不　中  
風　景　水　景　水　風　花　山　中　不　中　不　中　不　中　不　中

今枝のありも風の情やうめめむ  
峰のゆめもいよこふう色のそふ  
雪の梅のすくさくさう山此月  
人昔ハ委めも伊の梅のうむ  
手おんとそぎハ枝あしうめむ  
若うみやうもも腰けり梅のそむ  
名坏ハ田舎よ多しうめむ  
障子よと鳴りあゆふよ梅のうむ  
又初手の雪ハあゆり梅のうむ  
月の清水梅地流ハ雪のうむ  
月よると留らるるうめむ  
うらうらとそぎをそぎハ梅のうむ  
雪いとそぎをそぎハ梅のうむ  
梅中ハ自又ふきおるうむ  
うを嘆き梅の雪をそぎハ梅のうむ  
彩風の雪の葉あゆりうめむ  
朝夕の雪さハ雪ハ梅のうむ  
雪敷ハ雪ハ梅のうむ

庭　木　下　水　景　水　風　花　山　中　不　中　不　中　不　中　不　中  
風　景　水　景　水　風　花　山　中　不　中　不　中　不　中　不　中



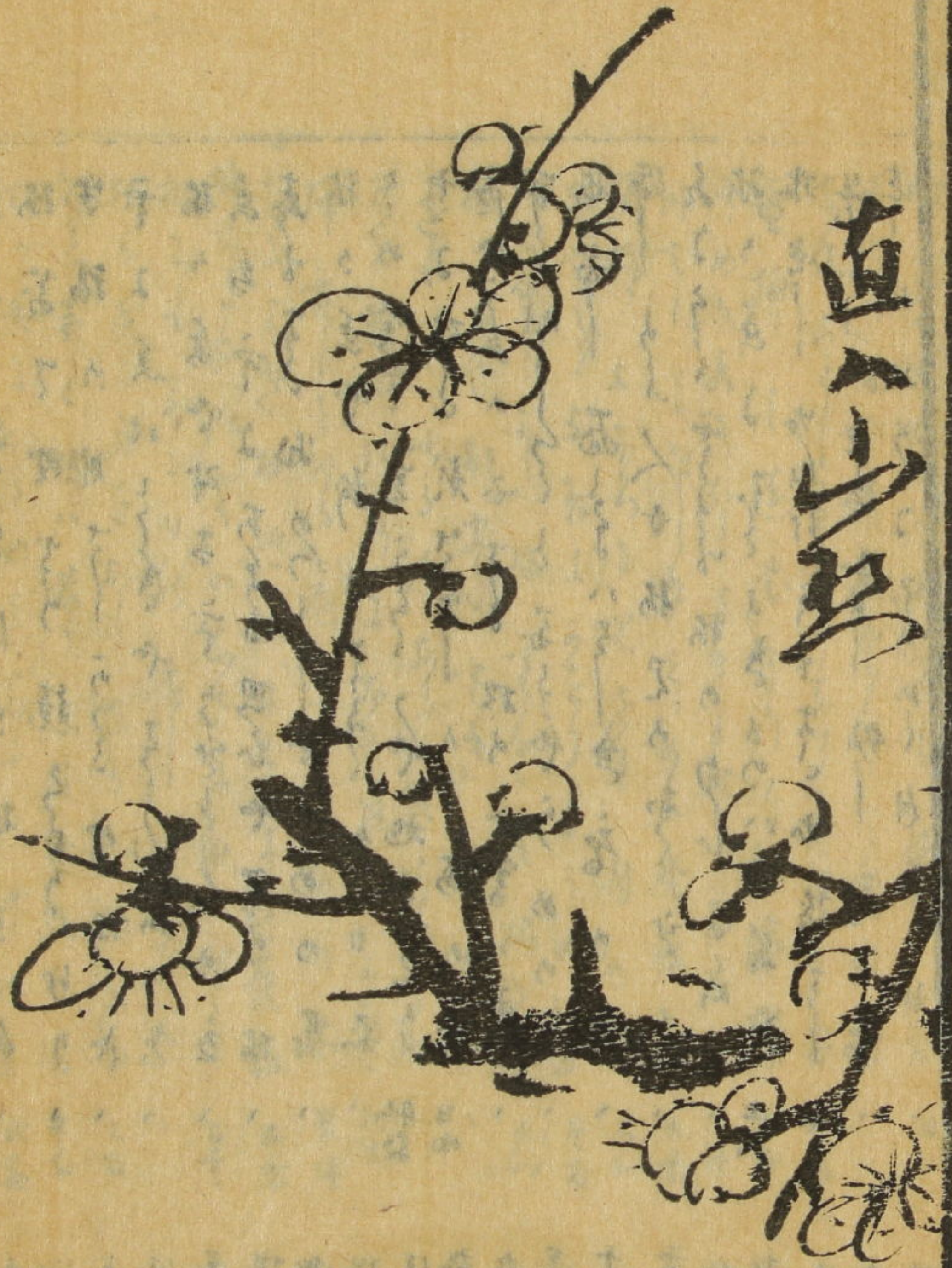


人のつと旭うをるやうぬ此を  
 梅さくやまふ二日ふるぬる  
 うまふ月懸あまふ人の住居る  
 賤くも月とふも暮るりりりり  
 らめと出る先又うぬ此 林うぬ  
 鳥くくの鳥さくもあな自と梅  
 又さくくや柳ハ暮るる梅ふ  
 梅さくくはれく音あま梅さく自  
 竹旅や返居しぬう梅  
 数中よ一木ハ梅さく梅さく  
 春も又月直うぬ梅さく  
 梅のさくえりら梅さく梅さく  
 何の家子ゆ梅のあま左梅さく  
 自とくぬ梅さく梅さく梅さく  
 梅さく梅さく梅さく梅さく  
 うぬ梅さく梅さく梅さく  
 いつの月よ此山梅さく梅さく  
 梅さく梅さく梅さく梅さく  
 梅さく梅さく梅さく梅さく

竹 山 樂 梅 山 樂 山 樂  
 山 樂 山 樂 山 樂 山 樂  
 山 樂 山 樂 山 樂 山 樂  
 山 樂 山 樂 山 樂 山 樂  
 山 樂 山 樂 山 樂 山 樂  
 山 樂 山 樂 山 樂 山 樂  
 山 樂 山 樂 山 樂 山 樂  
 山 樂 山 樂 山 樂 山 樂

梅の梅さくく梅さくく梅さくく  
 一梅つと梅さくく梅さくく梅さくく  
 梅さくく梅さくく梅さくく梅さくく  
 梅さくく梅さくく梅さくく梅さくく  
 梅さくく梅さくく梅さくく梅さくく  
 梅さくく梅さくく梅さくく梅さくく  
 梅さくく梅さくく梅さくく梅さくく  
 梅さくく梅さくく梅さくく梅さくく  
 梅さくく梅さくく梅さくく梅さくく  
 梅さくく梅さくく梅さくく梅さくく  
 梅さくく梅さくく梅さくく梅さくく  
 梅さくく梅さくく梅さくく梅さくく  
 梅さくく梅さくく梅さくく梅さくく  
 梅さくく梅さくく梅さくく梅さくく  
 梅さくく梅さくく梅さくく梅さくく

梅 山 樂 梅 山 樂 梅 山 樂  
 梅 山 樂 梅 山 樂 梅 山 樂  
 梅 山 樂 梅 山 樂 梅 山 樂  
 梅 山 樂 梅 山 樂 梅 山 樂  
 梅 山 樂 梅 山 樂 梅 山 樂  
 梅 山 樂 梅 山 樂 梅 山 樂  
 梅 山 樂 梅 山 樂 梅 山 樂  
 梅 山 樂 梅 山 樂 梅 山 樂



直入少画

嵐  
香  
波  
去







梅の影を 人の影より 影の影より 影の影より... (Main text on the right page)

梅の影を 人の影より 影の影より 影の影より... (Bottom text on the right page)

梅の影を 人の影より 影の影より 影の影より... (Main text on the left page)

梅の影を 人の影より 影の影より 影の影より... (Bottom text on the left page)

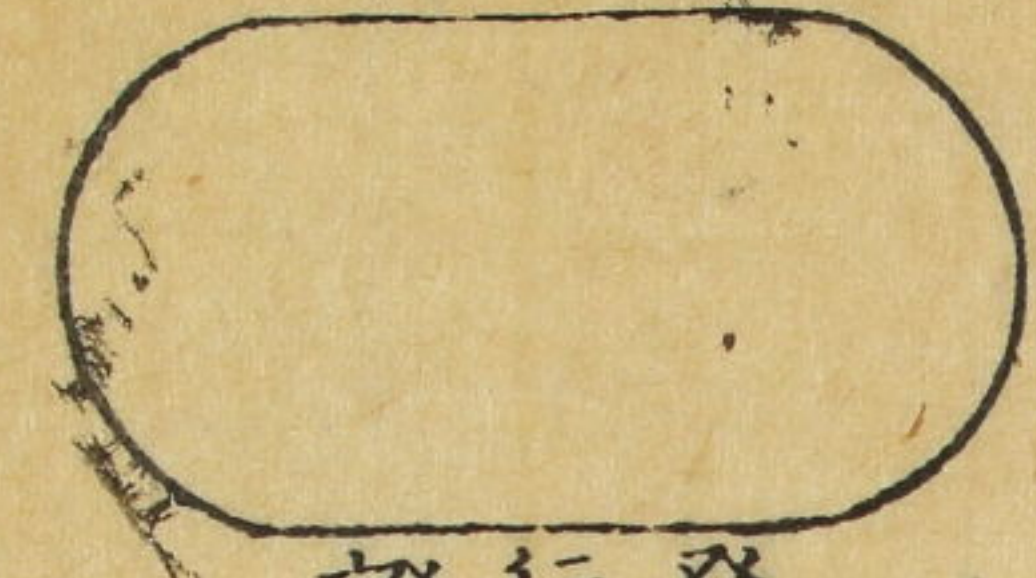
月の瀬記行坤の巻終

明治廿一年二月三日 印刷  
全 年 全 月 全 日 出 版

著述者 岐阜縣士族 上田 肇

下京區第十五組祇園南側町  
二百三十番戸寄前

兼述著



發行證

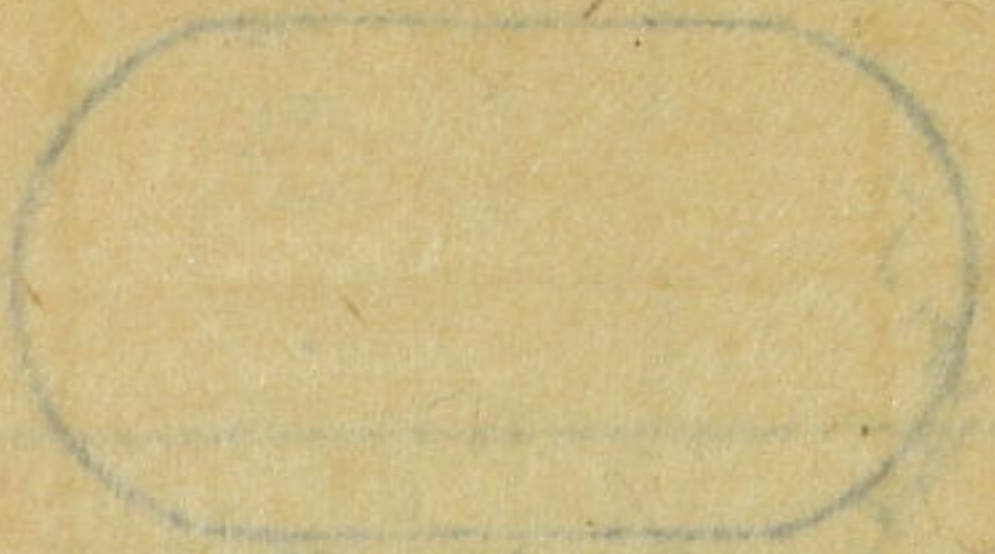
印刷者

京都府平民

辻本文四郎

下京區第五組中之町  
三十二番地

普救丹



普救丹

明師著

京師太平丸

正文四版

普救丹

土田肇

刻卓繼士

二百三十一番大書出  
東京醫學士正印所圖書部

全

全一冊全日

出

版

昭和廿一年二月三日

印

版

生存高放子

乘天堂 結緣了

就書